



まちてくギャラリー 28

日々 to 紛れて消えてしまう時にこそ、よみがえる記憶

2019年2月～4月の展示



土澤盆栽 "Tsuchizawa bonsai" 増子博子



cover -detail- 八木史範



僕の故郷の花祭 原田 光

まちてくギャラリー

増子 博子
八木 史記 菅沼 緑



印象の感覚 菅沼 緑

「まちてくギャラリー」 #28

2019年2月～4月の展示

作品写真提供
展示場所
発行

増子 博子・八木 史記
花巻市東和町土沢商店街 22ヶ所
東和町土沢商店街商店会連絡会
2019年3月

企画編集
菅沼 緑

tonccaci atelier
花巻市東和町田瀬 14-120
roqu@me.com 090-9154-5748



冬の終わりの雨の土沢



中設楽の花祭、須佐之男命（山見鬼）



中設楽の花祭、鬼と人の押し問答

原田光

前岩手県立美術館館長

土地にいきる人。
歴史という時間の流れが
ひとコマひとコマ、
一人ひとりに植えつけられ、
ゆるやかな小川のように
地面にしみ込んで、
土地にいきる



愛知県の奥三河が僕の故郷、静岡県、長野県と接していて、山深い。天竜川が伊那谷を南下してきて、この県境の山麓の底をえぐって突破し、遠州の平野へ抜けてゆく。まだ、学校にもゆかない頃だったが、静岡側の山中に、佐久間ダムがつくられて、峡谷は人工湖へと様変わりした。ダム反対のおじさんたちが都会からきて、僕の田舎の、どこだったかの山の一軒家で集会をした、などということもあつたりした。

だが、奥三河の山々のあいだを流れるのは、天竜の奔流にそそぐ2本ばかりの支流のほうであつて、支流に沿つた少しの平地に集落があり、さらに枝わかれして細流となつてゆく奥のほうにも、小さな集落が散らばつてあつて、少なくとも、南北朝時代以前には、住まいの原型ができていたらしい。それらの集落のいくつかで、花祭が開かれる。祭の歴史は古いという。もちろん、集落の歴史とともにあつた。

11月下旬から越年して3月初めまで、どここの集落で祭が開かれるか、予定も定め、公民館などを祭り場にして、一昼夜、踊り狂いするのである。昔は、古い農家の土間が祭り場だった。土間で火をたき、湯をわかし、鬼たちが、

湯釜の周りを跳ね踊つてまわる。寒夜に戸を立てた家中には、煙がみちる。目はしょぼしょぼ、頭はぼつとしてくる、そこへ狂乱が押し寄せてきて、ちよつと気が変に飛ぶということもおこる。子供のときの体験である。そう夜遅くまで、祭り場にいたわけでもなかったらう、誰かに伴われて帰つたはずだが、火祭の家を離れて、冬の夜の山道に踏みこむと、その暗いこと寒いこと寂しいこと、ずんとこたえた。

真冬に、太陽のもどつてくるのを願つておこなう祭だという。「霜月神楽」という。湯をわかし、あび、土地も人も清める。修験の行者と山の民の、神を迎え、邪を祓う信仰の、年に一度の乱痴気表現だったものが、山深い土地に守られて、残留してきた。そこへだんだんに、伊勢神楽なども加わつて、今の姿になつたという。

僕の部落に花祭はなかつたので、遠くへ見に行った。だが、家には、中気のせいで身体の不自由になつた祖父がいて、ときどき、僕に花を踊らせた。「テホへ、テホへ」と、祖父が口ずさんで、音頭をとり、その単調なリズムにあわせて、一歩いって、二歩もどる、ぐるっと回つて、しゃがみこむ、といった感じで、僕が踊る。あそこで

育つた山の子は、こんなふうにして、踊つて育つたわけだった。ずっと後に、展覧会仕事で、武蔵野美術大学の宮本常一資料館の人と一緒にしたとき、彼女に、「あなた、奥三河の人でしょう」といわれて、たまげた。腰を折つて、ずり足で歩く、それ、体に染みこんだ花祭だ、と。

ここ2年、年の暮に奥三河へもどつて、花祭を見てきた。歳とともに、帰巢本能があらわになつたかもしれない。東京の仲間を連れてゆき、小中学校のときの同級生らと合流した。この帰巢のきっかけは、しかし、どうも、早池峰神楽だった気がする。ある冬、それから夏に、早池峰神社に2度いった。神楽を見て、感激した。なんとも洗練されていて、様式的、動静たがいに争っている。笛太鼓も鉦かねの音も、謡の声も、ちよつとなんだか、あわれみ深い。能だとか狂言だとか、都の雅といったものを、反撥勢力のはずの、このえびすの土地にもちこんだら、神楽になつて定着してしまつた、そんなようではなからうか。

ふつと、自然と、わが故郷の、荒ぶる神が降りたつてきて、山の一軒家は、今、興奮と恍惚と無秩序の真つ只

中だといったふうな、土着の神楽と比べていたのである。同様に古い歴史をもった二つの神楽の、祈りの形。こうして、今度は、奥三河で花祭を見て、早池峰の神楽を目にうかべたりしたわけだ。

故郷の東栄町は、僕がいた1960年代初め、人口は1万人をこえていた。今は、3250人。天保時代の1837年に、5152人いたというから、今より多い姿を消した集落は少なくない。花祭も消えてゆく。3月初旬に舞われた布川地区の花祭が、これで、舞いおさめ、消滅というニュースを、読売新聞だから読んだばかりだ。人が古い、もう舞えない、囃せない、継ぐ人がいない。やがてふたたび山に化そうという町にいて、花祭に立ちあう。それこそ、火にかざしたように、花祭の発生とか、発展とか変遷とかが、集落の衰退をバックに、見えてくる気がする。数百年の歴史をとおした姿としても、あるいは、子供の僕の中に発生し、発展し、長いこと消滅していて、また、再発したのもとしても。

僕の中の意識の奥に、花祭の花が宿っている。人、土地、畏怖、拝跪、信心、一体になったとき生じる強烈な表現力が、きっと、僕に寄りついている。湯ばやしの湯

を浴びた者はみな元気になる。表現の発作を覚えて、生活の中へかけこんでゆく。花祭の夜、この初発の表現発作を自覚したなら、それが芸術のはじまりというものだと思う。僕の仲間も、みな芸術家だ。そういう話かしてみたい。

(はらだひかる)





まちをてくてく



増子 博子 ㊸中西金物店の前



八木 史記 ㊸佐々長建材店の前

画廊の入り口に貼られたたくさんの案内状から、それぞれの作家たちの蒸気がムワムワと立ちのぼるのいっつも感じるのです。

多くは10センチと15センチの郵便はがきです。その小さな紙の上にインクでしるされた作家の意思が湯気になって、瞬時につたります。消えた湯気は湿度になってあたりの空気をしっとり包むように媒体になるのです。

しかし、じつはそんな体験を与えてくれるのは1年に1度あるかな。自分が作る案内状に湯気ができるかな。でもね、ちいさな写真でも強さはかわらないんだと思っし、まして、たくさん壁に貼られると、ほら、あのクッキーのフタを開けたときのように、いろんなかたちがワッとあらわれてきて驚かされるみたいに、集合の力ってあると思うのです。

だから、1ヶ所にまとめて写真を集めればもっというんだよね。そんなこともそのうちやってみよう。

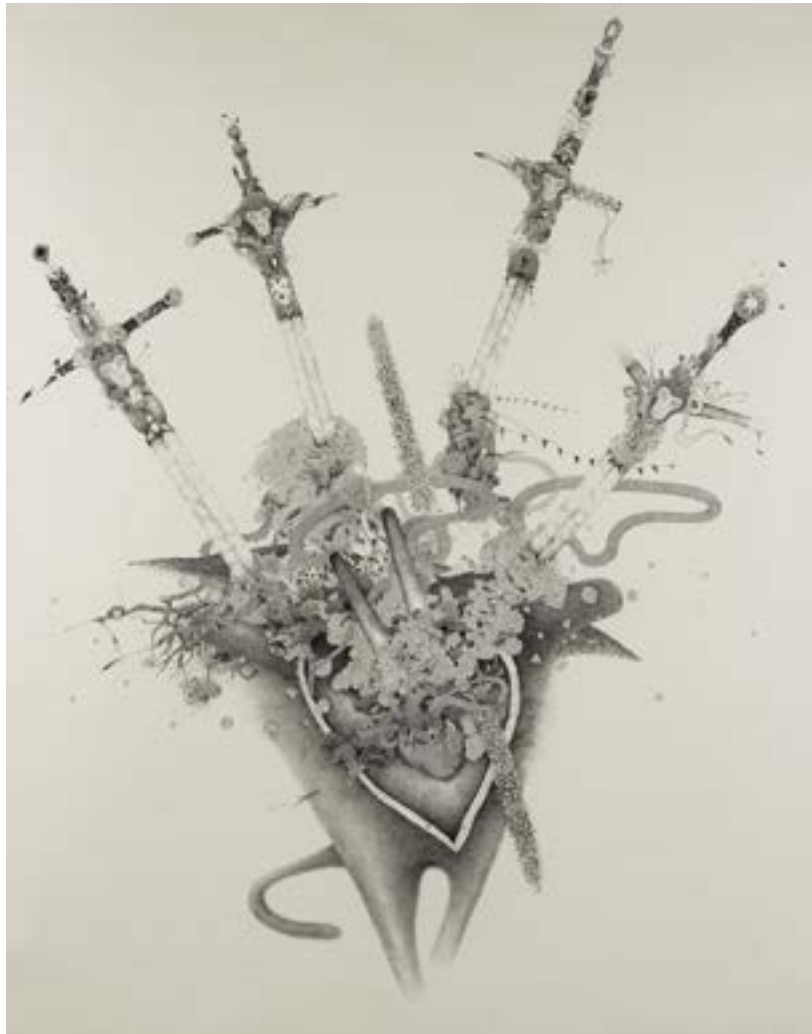
今回の28回目のまちてくギャラリーは、増子博子・八木史記さんの作品写真をいつもの土沢商店街の壁に点々と張り、並べています。

増子 博子

ましこひろこ

時代の川

川の流れが時代を作るのかもしれない
 と思っっていたけれど、彼女がタイトル
 にしている「側の器」^{かわのうつわ} っていうのも彼
 女の川の流れなのかもしれない



土澤盆栽 "Tsuchizawa bonsai" 270.0×210.0cm ペン、インク、鳥の子紙 2011年

美術の作品もまた多様に存在するのは当然ですが、それにしては不思議なことだと思わずにはいられません。

作品を作るその発想というか、イメージの生まれ方にも不思議な感慨を覚えずにはいられません。

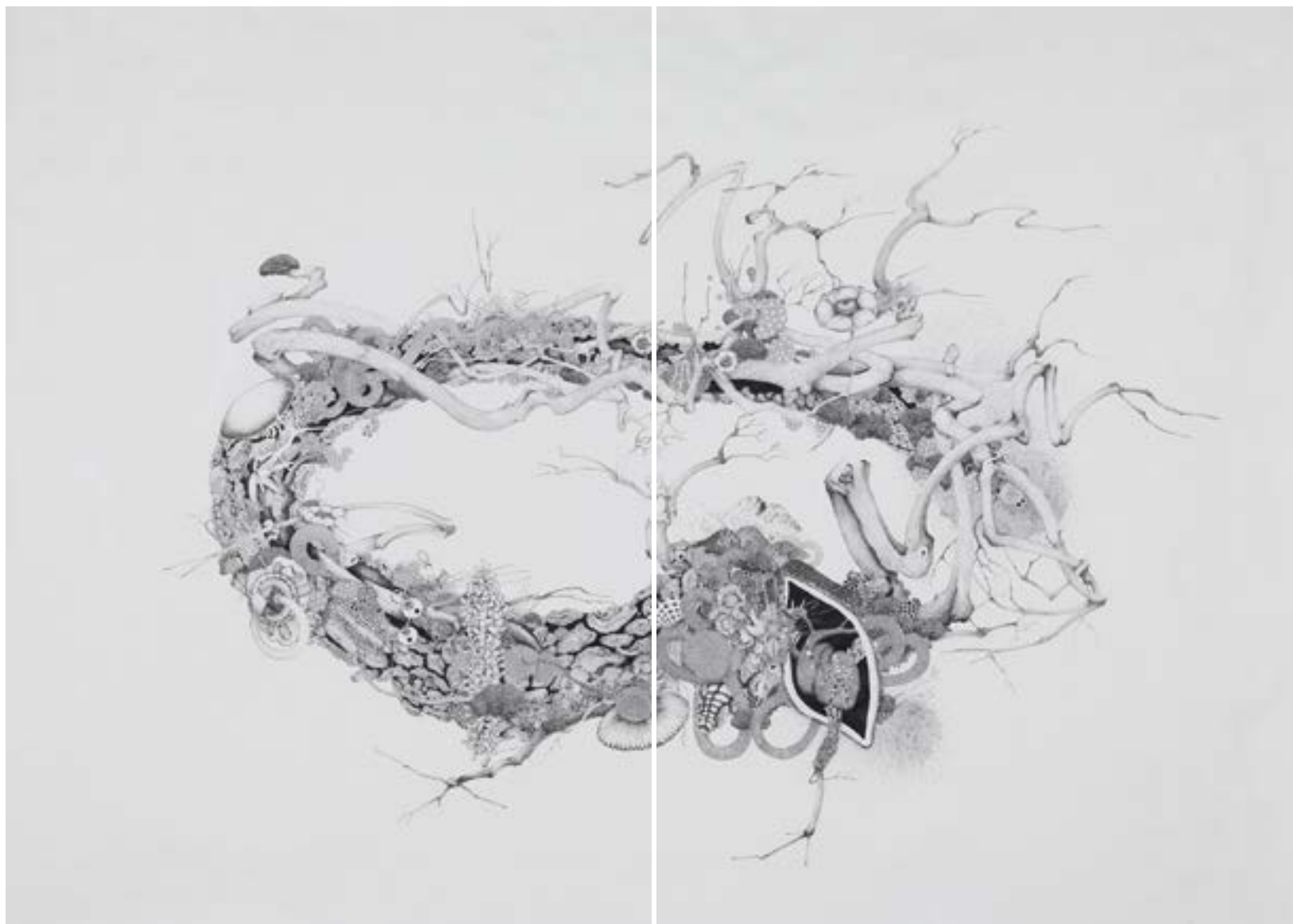
左のページの「土澤盆栽」という作品は、300号ほどの大きな紙に、ロットリングの細い線で、細密な絵を次々に、つぎ足すように描きながら描かれているのです。

これは、2011年の街かど美術館（東和町で開催したアートプロジェクト）で公開制作されたものです。この細密な絵を、多くの人が次々と訪れる中で、さまざま質問にこたえつつ、談笑を繰り返しながら、仕上げられたものです。よほど、集中力を要求されるだろう、ごくごく細い線を縦にも横にも、繋げながら拡大する細密な描写と、日本画のようでありながら、正体不明の有機的な形態や、現実にはあり得ない、シュールレアリスムのようなありさまの画面を見て、新しい時代の、若者たちの感覚に触れたような気が強くなります。そして、こういうかたちや線の生まれてくるころというのは、いったいどういう場所なんだろうと思います。

時代を作る流れが、産みだすものなのでしょうか。ま



心 "Heart" 162.0×224.0cm ペン、インク、ワトソン紙、木製パネル 2008年

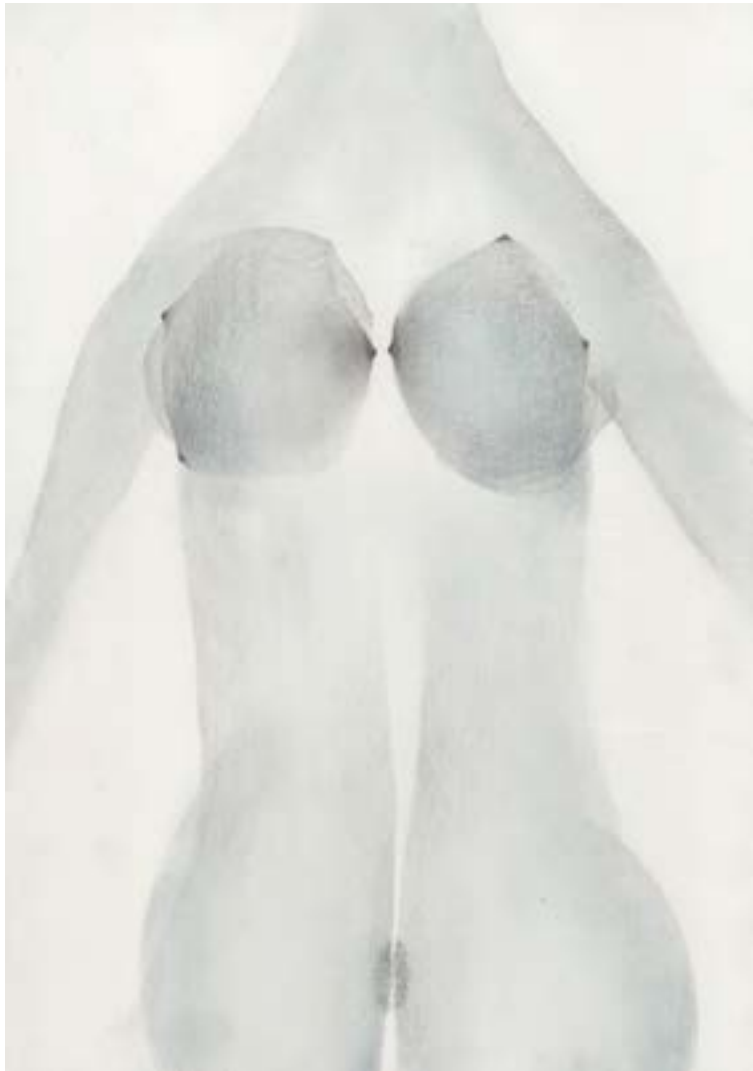


ウロボロスと花かむり "Ouroboros and corolla" ペン、インク 鳥の子紙
レジンダーサ 182.0×242.0cm 2012年

た、時代の流れというのも不思議なかたちをしていると思うし、それは人びとの意思とは別の動きを感じさせるものでもあるような気がします。私が感じてきた60年代の熱気のちぐはぐさ。70年代にはどこか味気のない理詰りめな覚めた感じ。それが2000年に入ると、その覚めた眼差しは、理屈から離れて感覚的に、表面の世界へなだれ込んだという感じがします。その感覚的な流れは、世界的なポピュリズムとなってさらにズレと歪みをましているように思います。地球ですら身震いをするように巨大地震を連続しているくらいです。

川の水にしても、誰も意図をするわけでもなくただ地形に沿っているだけなんだろうに、上流の細い時にならばまだしも、大きなうねりになってしまっただけからでは人の力などではどうにもならないでしょう。時代の流れも同様だと思います。

若い人にとっては、60年代のことなど知るわけもなく、ただ現在というアウトプットの最先端で、もろに時の社会の流れを受け止めざるを得ないのに、やれ今どきのは、と揶揄をされても、そんなこと知ったもんかい、と聞き直るしかないだろうと思います。



側の器 2017.01.21 "kawa no utsuwa 2017,01,21" 鉛筆、パステル、ケント紙
25.7×18.2cm 2017年

60年代にあった、モヒカン刈りは反抗と抵抗の現れだったはずなのに、今ではソフトモヒカンと称して、世界中の若者たちのスタンダードか、と思うくらいです。流行は繰り返すといいますが、繰り返しても同じではないのでしょうか。そりゃあそうだ。同じことだけを繰り返されたのでは、進歩や変遷の生まれようもありません。20世紀の終わりごろ、哲学書のイラストレーションのような作品の羅列から、21世紀は早くも、20年すぎようとしながら、どういう流れを作りだそうとしているのでしょうか。

増子さんはその流れの中の、なにを担うことになるのか、などと考えながら、これらの作品を見ているのです。作っている本人に見れば、現在の自分の関心事に添っていくのが当然だろうし、時代というより、自らの視線に添うことでしょうか。

21世紀の5分の1が過ぎようとしている中で、今流れている川の水が急流にさし掛かっているのか、淀みにたえずんでいるのか、あるいは、海に流れ出て、大浪に翻弄される潮の泡なのか。

いろんな場面を想像しては、無理やり今を思い、ある



側の器 2016.02.15 "KAWA NO UTSUWA 2016,02,15" ペン、インク、ケント紙
18.2×25.7cm 2016年



側の器 2019.01.06 "KAWA NO UTSUWA 2019,01,06" 水彩絵の具、ワトソン紙
16.8×23.7cm 2019年

いは象徴を作り出そうとする、そんな悪い癖に陥るわたしですが、それは私の勝手な想像です。でもきつと、増子さんの視線はそんな俯瞰ではなく、自分が何をしようとしているのかに、最大の関心があるだろうし、自らに忠実なはず。その結果として、時代を写す鏡のようになっている面もあるのかもしれない。くり返しになるけれど、当然、ひとりの作家としては、自分自身の内側に向き合っているはずだと思います。

私がただ想像しているだけのことですが、だからなのか、ロットリングの線で作られた、細い線の集合体のような、神経質なようでありながら、成り行きにまかせられた感じのする作品。水彩の滲んだ不定形ながら、どこか具体的で、かつ、肉体とかい離しかねる精神、といったふうの不安定さ。対照的な傾向の作品でも、どこかで共通するのは、成り行き任せ、と思うくらいの、ずぶといくらいの太さなのかもしれません。

そんな感想を持つのは、60年代のしつぽを引きずりながら、いまだになにも分からないだらけのじい様のうわごとなのかもしれません。

®

略歴

宮城県生まれ
宮城教育大学 大学院修了
2011〜17年まで若手県
現在は栃木県にて制作
Gallery Jin Projects (東京)
Cyg art gallery (盛岡)
リアスアーク美術館(気仙沼)
個展グループ展多数

2007 東京ワンダーウォール賞
2010 ひとつぼ展入選
2011 群馬青年ビエンナーレ入選
2012 「ゲンビどこでも企画公募2011」
2018 岩手県美術選奨
VOCA 2018

web <https://www.bonsai1.org/>
mail hir-okohiroko82@yahoo.co.jp

想像コントラスト

いくつかの対比があつてこそ、ひとつ
がみえるし、全体も輪郭を描きはじめ
るんだと思うよ。
え、当たり前だつて？うん、当たり前
が、ふしぎなんだ



cover 10×10×3cm セメント、ステンレス 2018年

八木さんの作品とは2回目の街かど美術館で出会った
2006年が初めて、今回までの13年間はブランクです。
作品を観るということは、おもに直感だと思うのですが、
実際に視覚的にも触れ、場合によっては手でも触る
くらいの行動によって、感じなければならぬこともあ
ります。だから、写真だけというのは、かなり制約を受
けることは否めません。

だけど、このまちてくギャラリーというものを思いつ
いたきっかけは、私の手もとに送られてくる、さまざま
なダイレクトメールの写真や、画廊の入り口に貼られて
いるはがきの写真を観て、きれいだと思うことも多々あ
るし、そこから伝わることは、実際の作品に接したとき
の感覚にたがわない場合もしばしばだと、かねがね思っ
ていたからです。

だから、この八木さんの作品写真からだけの感想で
あつても、ある程度の感触はそれほど間違わないだろう
とも思うのです。もちろん、八木さんに確認はしますけ
れど。

この小冊子の前々号で、もう書くのはやめる、と書い
たのは、1000部も印刷するようになって、散らばっ
た先で、独り歩きを余儀なくされている今、私の知らな
いところで、客観的にこれを読む人が、私のとんちんか
んな感想から、なんらかの情報を得て、作家の意図とは
全く違う印象をえて、そのことが作家の不興を買うこと
に、いや、迷惑になってしまうかもしれません。
それは、無責任な情報の垂れ流しになるかもしれない
と思つたからです。
だけど、今回、やっぱりまた書きはじめるのは、偏り
のある感想になるのかもしれないけれど、偏りのない感
想なんて、ある意味ありえないのです。私の感覚で感想
をのべることが、失笑を買うことがあつても、あえて続
けようと考えました。

13年前の街かど美術館で、八木さんが展示したのは、
やはりセメントの鑄造というのでしょうか、石膏取りの
ように、セメントを型に流し込んで作つたと思われる、
50センチほどの小便小僧の立像です。頭のとっぺんから
ホースを差し込んで、おちんちんから水が流れ出る、と
いう真面目腐った彫刻を揶揄しているのかなと思うよう
な作品でした。

そして、今回送られてきた写真もやはり、セメントの
ものでした。



cover 45×45×3cm セメント、ステンレス 2018年



detail(cover) 10×10×3cm セメント、ステンレス 2018年

ずっとセメントを使い続けているんですね。直径が30センチほどの円盤や、四角いセメントの板にステンレスとしてありましたが、細いステンレスの棒を網目状に組み合わせ、ろう付けして、着色されているのだと思います。

それを壁に掛けているので、掛けるのに重さの具合が悪いこともあるのではないかと思います。さらに大きなセメントも壁掛けになっているところを見ると、裏をくってあるのだと思います。

鶴首の小さな壺のようなセメントもあつたりするのを見ると、たぶん、セメントの鑄造に自信があるのでしょう。そうした技術的なことは、実際にものを見ていないので、とりあげられませんが。

たぶん、思ったのはセメントと色のついたステンレスの針がねのような棒。それに、セメントのハチに植えられた草。などなど、セメントの形とそれに加えられたもうひとつの組み合わせ。

ものと、ものとの組み合わせが作者のねらいとして作られる、コントラストなのかと思えました。そういう、想像の上に作られたものの対比は、作者の想像と意図として作られているのかなど。

ものや、ことの様子を説明するのに、私たちはまず状況を説明するところから始めることがよくあると思えます。むしろそれが普通かなど。でも芸術の場合はどうなんでしょう。状況の説明とかをすっ飛ばして、いきなり結論！っていうこともありうるよな。芸術というのは、理路整然ということももちろんあるけれど、支離滅裂もあるんだろな、と思います。どっちがどうということではないけれど、そういう、いきなりすっ飛んでしまうこと、つまり想像の飛躍ってすごいなと思うのです。

想像が飛躍するのなんて当たり前だ、といわれるかもしれないけれど、子どもの頃電車で通学をしていた私は電車の中で、次々に移り変わる景色と同調するかのようない、思いつくことが飛び交うのです。お前は落ち着きがない、と親にもいわれるけれど、しかたがないよ、思うことは入れ替わりながら時をすごすのだから。落ち着きもなくなる。

そういう単純な想像の飛躍は、モノゴトを理解することの大事なプロセスなんだ。頭の中で想像をするという



birthday 10×15×10cm セメント 2013年



cover 45×45×3cm セメント、ステンレス 2018年

ことは、むしろ飛躍の連続で、その飛躍が想像の具体化をしているのじゃないか。

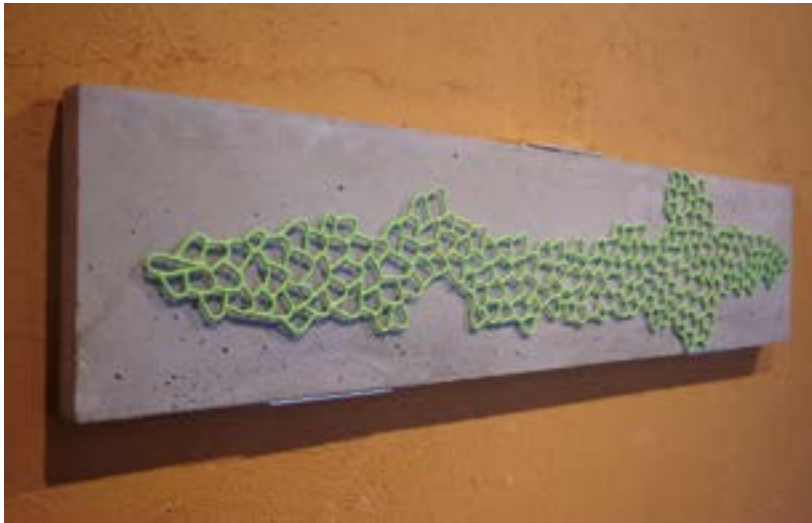
具体ということも難しいことだけれど、わたしが直感的に思う具体は、抽象にさせられて、具体だけでは直感できないように思うのです。

具体を直感するためには、想像の飛躍が必要なのだ！
いやいや、実に抽象的であまいな説明です。

なんだか安直で安っぽい説明しかできませんが、想像の飛躍のすき間に具体が生まれる。そんな感じがするのです。ここは、そんな説明でスルーしてつきいきます。

植物が地中の栄養を取り込むのに、有機物がバクテリアなんかで分解されたものを、吸収しているのは植物の中でももう一度、独自の物質を、オリジナルなものに組成できるようにしているんじゃないかと思うのです。

ミントの葉っぱが、あの芳香を作るためには、独特の成分を直接吸収しているのではなくて、空気や水とか窒素やリンと一緒に光のエネルギーを吸収して、身体の中の遺伝子由来の能力を使って、養分をオリジナルに変化させるから、なのではないかと思うのです。



cover 20×90×3cm セメント、ステンレス 2018年



the kids are alright 40×20×30cm セメント、2017年

コミュニケーションの想像も、まして芸術的な想像の理解を伝達するためには、想像の飛躍が必要なんじゃないかな。乱暴な推論かもしれないけれど、想像するということは、飛躍するということは、その「分解作業」なんじゃないかな。

思ったり想像したりしながら、飛躍していくことで、別のものに分解されて変化するんだろう。あるいは、飛躍することが、分解することおなじような働きを持って、自分というものへの同化のための、吸収作用を促しているんじゃないかと思うわけです。

うまく説明になっていないかもしれないけれど、飛躍はそれが暗喩のように働くんだろうな。

養分の吸収と、想像の飛躍が理解の吸収につながるのではないかと、もっといいねいに説明しなくてはいけないかもしれないけれど、今はうまくできそうにない気がします。

で、八木さんのセメントとステンレスのコントラストというか、そのふたつになんの関係があるのか分からないけれど、それは想像の飛躍だと思ったのです。セメントのざらざらとした表面をつるつるした表面の

ステンレスの針金がおおう。ざらざらとつるつる。異質なものが同居するコントラストは、飛躍だともいえるのでしょうか。

八木さんのその飛躍の間に、本来の想像がしくまれていたのではないのでしょうか。

®



still life 45×45×30cm セメント 2018年



ground of rest 80×25×30cm セメント、鉄 2015年

- | | | | |
|------------------------|------|--------------------|----|
| 他グループ展、
アートイベント等に参加 | 2017 | 第12回大黒屋現代アート公募展 | 大賞 |
| | 2016 | 第13回大分アジア彫刻展 | 入選 |
| 受賞 | 2018 | 板室温泉大黒屋 | |
| | 2017 | カフェギャラリーCROSS ROAD | 宮城 |
| | 2016 | TURN AROUND | 宮城 |
| | 2015 | ギャラリー彩園子 | 岩手 |
| | 2014 | 2015 ギャラリー現 | 東京 |
| | 2011 | 2012 SARP | 宮城 |
| 個展 | 2007 | re:bridge edit. | 宮城 |
| | 2005 | 宮城教育大学教育学部芸術文化専攻卒業 | |
| | 2007 | 宮城教育大学大学院美術教育専修修了 | |
| | 1982 | 岩手県盛岡市生まれ | |
| | | 八木史範 YAGI funinori | |



わたしが暮らす田瀬地区はダムによって山間部へ移動した集落です。昭和29年のダム完成後農業が一変したということです



春になれば枯れ山に新芽が勢よく吹き出てきます。もう少しのしんぼう

小学校へ通い始め、音楽の時間にはじめて、歌というものを習いました。よほどわたしは楽しかったのでしょう、家に帰るなり、報告をしたんです、「今日は歌を習ったんだよ」と。

台所でなにか、したくをしていた母親に、「あかいとりことり、といううただよ」と興奮めやらない気持ちで披露したのです。流しの縁にひじをつきながら豆のサヤを剥いていた母親は、「あんたは可愛そうな子だね」と寂しそうにつぶやいたのです。

たぶん、ユングのいうところの外向的感覚タイプと分別されるだろう、落ち着きのない小学1年生。母親のその言葉の意味も理解できなかったと思います。シヨックだったという記憶もないのに、そのシーンは覚えていてということとは、なにかそれなりの印象があったのでしょうか。その時の光景と、ぼくはうれしくて歌を唄ったんだけどおかしいな、という感覚だけが強く記憶に残っています。

そして67年が過ぎ去った今でも、ときどきフラッシュバックのように、台所の窓のすりガラスのあかるさ、春の風が通り過ぎる部屋の空気。ぼんやりと記憶しているのは、つぶやく母親の姿と、蛇口からこぼれ出る水の音を記憶しているのです。

メロディとか、音痴という言葉も知らないだろう小学1年生にも、雰囲気として、さびしい印象と感覚がずつと残ったのです。

やせっぽちで、すぐにお腹をこわす、弱々しく蒼白い1年坊主が、年上の悪ガキにいじめられ「お前は明日、5円もってこい」と、階段の踊り場でくびねっこを押さえられ、おどかされても、すぐに母親に報告をする率直で、世の中のことなど疑うことも知らない子どもなのです。

なんでも学校であったことは、話さずにいられない。学校という社会と、家庭の中での自分とにしか、世界がなかったのかもしれない。あ、それは当然か。

もうひとつ、いまだに残っている印象的な記憶は、お腹の弱いわたしは学校でおもらしをしたのでしょうか。広い誰もいない校庭に金だらいを出して、若い女の先生がわたしの汚れた脚を洗ってくれている場面です。

先生の肩に手をつけて、うつむきながらそのようすを眺めている記憶はどこか絵空事のようにからっとした気分もします。

たぶん、ていねいに、じゃぶじゃぶと洗ってくれてい



木々の枝の間から湖面の水が見え、納屋の屋根が朝陽を受けて光っています

るだけなのかもしれません。

映画のストーリーや、本の中の事柄が記憶に残るのではないのです。川端康成を読んでも、ちりめんの紫色のふくさのようだと思うだけだし。三島を読めば金屏風のようだと思うばかりなのです。金屏風のようだと感じることは、理解ということにはならないのですが。

先生の姿を上から眺めながら、やさしい先生だなど思うことは理解ではなく、それは印象しかありません。

お腹をこわして、授業を中断させてしまったり、やさしい先生の善意に助けてもらっているのに、そういう自分と他人の関係の中で成り立っているはずの、たくさんの条件の、なにもをも理解するどころか、自分の小さな眼で見える「その時の場面」だけで印象を作り上げてしまう子どもだったのでしよう。

ちょっとあたまが足りないんじゃないか、ということも思わず、印象と心象とを重ねて、自分の中に湧いたことが、やがて理解ということにつながるのだろうと、いつのころからか、そう思うことでよしとしていました。

そして、芸術という直感と思考の坩堝の中にとび込んでしまったことで、その基準や水平がますます、あいま



人も車も通らなくなったアスファルトに亀裂が入って、コケがはえはじめていました

る先生の後頭部を上から眺めながら、なんだかやさしい先生だなあと、自分の立場を知りもせず、他人事のようにしか感じていない、そのとんちんかんな光景が、ときどきよみがえるのです。

早生まれの6才です。歌を唄うとか、くびねっこを押さえられ、古い木の床の冷たい感触と怖さ。じゃぶじゃぶと無機的にも、やさしくひびく水の音の他人事。

そうした皮膚の触覚や耳などから、感覚されることたちが、わたしの記憶に残り、どうやら想像と思考が始まるのです。たぶん。

記憶は水の音や窓の明るさなど、感覚に支配され、裏打ちされて、印象づけられてのち、記憶として定着しているのだと、強く再認識するようになりました。

映画を見たり、本を読むようになって、わたしは印象で咀嚼をし、吸収とともに、体内に取り込んでいるのじゃないか。そして、定着するのに、わたしは時間がかかるのだと考えるようになりました、理解をするのに。

いや、それは理解ではないのかもしれませんが。理解などではなく、自分で理解したような「印象」を作っている



天気の良いくなる日の朝は霧が湧いて真っ白に



広葉樹のの葉は落ちて、地面をおおいます。風の吹いたあとは驚くほどの葉がまっています

いになって、不安も同時に感じていました。

学校の授業で「全ての芸術は音楽の状態に憧れる」という言葉を聞いたときにびっくりした記憶があります。

わたしはそれを、音楽だけが身体に直接感じさせることができる。というように受け取ったのです。そして、感覚することのすごさを、さらに強く胸にきざんだのです。

だけど同時に、感覚とそれを受け止めることの率直さに、疑いも感じてしまいました。感覚と、それを率直に受け止めることの中に、まだなにか別のものがあるのではないだろうか、とね。

おうおうにして、感覚だけで受け止めて、それをもとにして考えを進めていると、おかしな方向にたどりついてしまうことがときどきあると感じていたからです。

感じることで、考えるということには、大きな疑問や矛盾があるんじゃないだろうかと疑うと、おかしな疑問や矛盾に突き当たって、ぬかるみにはまったようになることばかりです。

音楽の状態のように、感覚や印象からモノゴトを判断することも、正確ではないかもしれませんが、率直な感

覚と考える方法のひとつだ、と思ったときから、その感じることで、考えることとうまくかみ合わないという、ぬかるみが消えたように思いはじめたのです。

印象から定着する感覚も、記憶されることで、具体的な概念へと変化するのだと思うのです。まるで、音楽がじかに響くように。

母親はわたしの唄を聞いて「かわいそうな子だね」ともらしたけれど、そんな音痴でも音楽をきくことはできるし、たのしみこともできます。新宿のモダンジャズの喫茶店で、タバコの煙りにまぎれて、知ったかぶりの顔をしてても、音痴がばれない程度にね。

音楽は音痴に対しても芸術を温存していたのですね。

(すがぬまろく)



岩手あたりに実る柿は全て渋柿。カラスもつつきにきません

舌の根も乾かないうちにまた書き始めてしまいました。懲りないヤツです。作品写真の感想をです。

あくまでこれらの文はわたしが感じた感想で評論ではありません。評論というのはたぶん、縦横斜め、どこから見ても破綻のない論証をかさねたのちの、まあ、それも感想といえましょう。視点や焦点を定めて論じられたものことだと思っております。

そこにはおのずと責任を持って考えられた重さもあり、確かさもともなうことになります。

あやふやな視点しか持っていない自分が書くのは、個人的な感想で、そうした感想は誰でもがそれぞれの立場で感じたりすることと変わらないスタンスだと思えます。その範囲で作品について感じることを書き殴ったからといって、無責任な投げやりな言葉にならない範囲で公表したところで許されないものでもないよな、と考えるとき、書くことをやめたくないな、と思いついたわけですね。あしからず、許していただければと思います。